

「わたしは道であり、真理であり、命である」 (ヨハネによる福音書14:1-14)

■信じる

「信じる (ギリシャ語ピステウオー)」という単語は、新約聖書では243回使われ、ことにヨハネによる福音書では98回と最も多く使用されています。ヨハネによる福音書のクライマックスには、「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、信じてイエスの名により命を受けるためである。(ヨハネ20:30)」と記されています。ヨハネによる福音書が記された目的自体、わたしたちがイエスをメシア (キリスト) = 救い主として、「信じる」ためなのです。では、救い主メシアとはどのような存在なのでしょう。

■メシアはわたしたちを放っておかない

今日の福音は、世を去る主イエスが弟子たちに残した「告別説教」の一部です。弟子たちは、主イエスがいなくなってしまうことを聞かされ、心乱れています。その弟子たちに主イエスは語ります。

「心を騒がせるな。神を信じなさい。そしてわたしをも信じなさい。」

このことから言えることは、まことの救い主は、わたしたちが「心騒ぐ」ことを放っておかれない方である、ということです。弟子たちのように、わたしたちもまた、生きるなかで心騒ぐことに直面します。この「告別説教」の直前の箇所は、ユダが夜の闇へと出ていく場面です。わたしたちの生きる世界、わたしたち自身の生涯は時に、ユダが出ていった「闇」に支配されてしまったかのように感じられることがあります。心配事や、圧倒的な悪的存在との対峙、自分の力ではどうにもならないこと、将来や健康への不安、不条理のなかで殺されていく命、身近な人の死…。そういうものに直面しながら生きるのがわたしたち人間です。そしてそのようななかで、時にわたしたちは、「心の騒ぎ」に支配され、希望を失い、生きる力を失うことがあります。闇の力が勝っているように感じる場合があります。しかし、まことのメシアである主イエスは、そんなわたしたちを放って置かれない方なのです。そのようななかを生きるわたしたちに、光への道を照らしてくださるのです。ユダが夜の闇に消えたあと、主イエスは弟子たちに「互いに愛し合いなさい」という新しい掟を授けました。そうして、弟子たちが闇に留まることのないように、道を示されたのです。光である主イエスのもとを離れたユダは、闇へと向かいました。しかし主イエスは光に留まっています。心騒ぐわたしたちを放っておかないメシアは、闇のなかに光をもたらしてくださる方なのです。

にもかかわらず、人は弱く、闇の力は強いので、その道が照らされていても、人は光から離れてしまうものです。これもまた、わたしたちの実感するところではないでしょうか。しかし、その人間のことを深く知ってくださっているからこそ、主イエスは繰り返し、「信じなさい」と励ましてくださいます。闇が勝利することは絶対にない、あなたは必ず光のなかへと迎えられる、そのことを信じなさい、と主イエスは繰り返し励ましますのです。信じるのが大切なのです。

■二つのことを信じる

まず、主イエスが弟子たちに求めたのは、イエスとその言葉を信じることでした。主イエスがいなくなってしまうことに動揺する弟子たちがまず信じなければならないことは、主イエスの次の言葉です。

「わたしの父の家には、住むところがたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいるところに、あなたがたもいることになる。」

この主イエスの言葉の何と恵み深いことでしょうか。主イエスは確かに、一度はいなくなってしまう。しかしそれは、永遠に主イエスと一緒にいられる場所を用意しに行くためなのです。ここで「住むところ」と訳されている単語は、ヨハネによる福音書のキーワードである、「留まる」という単語の派生語です。「わたしに留まりなさい、わたしもあなたがたに留まるから」「わたしはぶどうの木だ、あなたがたはその枝だ。このぶどうの木に留まりなさい」と言うように、主イエスは繰り返し、主イエスご自身がわたしたちに留まってくださること、その主イエスにわたしたちも留まるならば、いつでも、それこそ時空を超えて、わたしたちは主イエスとの交わりに生きることができるのだ、と語られます。その主イエスが用意してくださる「住むところ」とは、もう二度と、主イエスと、そして神との交わりから離れることのない場所のこと、すなわち、神の国です。主イエスのご自分の命をささげ、たとえ神から離れてしまっている人であろうとも、すべての人を赦し、すべての人をこの神の国に迎えるために、場所を用意しに行ってください。主イエスの死は、闇への敗北なのではなく、「あなたがた」のための死であり、わたしたち皆が主イエスと神との交わりに永遠に共にいられるようにするためなのです。この主イエスこそまことの救い主です。だからこそ主イエスは、ご自分のことと、その言葉を信じなさい、と言われていきます。場所を用意しておくから、心を騒がせるな、大丈夫だと主イエスのご自分の命をかけて伝えてくださっているのです。

次に主イエスは、「わたしは道であり、真理であり、命である」ということを信じなさい、とされます。今週の福音には、父という単語が12回も使われています。神は、「父」と呼ばれることを拒みません。それほどに人を思い、呼びかけ、ご自分の心を伝える神です。その思いが先に届けられるからこそ、人はその思いに応え、最大限の親しみを込めて、神を「父」と呼び、その御心に従って生きたいと望むのです。誰かが自分を思って手紙をくれたら、嬉しくて返事を書きたくなるのと同じです。しかし残念ながら、神の御心や呼びかけというものを、人間はすぐに理解することも受け取ることもできません。そこで、「わたしが父の内におり、父がわたしの内にいる」と宣言する主イエスが、父のもとへわたしたちをつなげる「道」として、わたしたちのもとへと遣わされました。それゆえ、わたしが真理と命への道であることを信じなさい、と主イエスは言われるのです。

■十字架と復活という道

主イエスは神を、神の国の真実をご存知です。しかし、その世界を知ること、その語ることを完全に理解することも、人間には不可能です。そのことが、「主よ、どこへ行かれるのか、わたしたちには分かりません。どうして、その道を知ることができるのでしょうか。」というトマスの言葉に端的に表されています。ならば、わたしたちはどのようにしてその真実を知り、目の当たりにすることができるのでしょうか。フィリポは主イエスに正直に問いかけました。「主よ、わたしに御父をお示してください。そうすれば満足できます。」これに対し、主イエスは言われます。「フィリポ、こんなに長い間一緒にいるのに、わたしが分かっていないのか。わたしを見た者は、父を見たのだ。…わたしが父の内におり、父がわたしの内におられると、わたしが言うの信じなさい。もしそれを信じないなら、業そのものによって信じなさい。」やはり、信じる、ということなのです。われわれの信仰はいつも、分かったから信じるのではなく、信じるから分かるのです。主イエスの言葉は信仰によってしか分かりません。しかし、言葉を信じることができないなら、業によって信じなさい、とも主は言われま。神は主イエスを通してご自分を表します。主イエスの言葉はすなわち神の業の表れですから、主イエスの業を通して、わたしたちは主イエスの言葉を、そして神をも知ることができるということです。だから、業を信じることで、わたしたちは言葉をも、神をも「分かる」のです。では、業とは何でしょうか。それこそ、主イエスの十字架の死と復活にほかなりません。主イエスをご自分を「道」と言われました。しかし、「道」と言っても、それは柔道や茶道といった、キリスト道のようなものがあり、修行を積みば極められる、という道ではないのです。わたしたちは、道である主イエスの言葉、そして出来事を目の当たりにしていく、主イエスとの旅の中でしか、神の出来事の真実を知ることには出来ないので。その旅の行き着く先こそ、十字架と復活です。言葉だけではどうしても信じることができない弟子たち、人間に向かって、「わたしという生身の人間を通して起こされる神の業から目を離すな、このことによって信じなさい」と、主イエスは十字架と、復活を指し示すのです。ここに神の愛が、真理と、命が示されるからです。わたしたちは、その十字架と復活という「道」を通してこそ、深い愛と赦しを自ら経験し、心騒ぐことから解放され、主イエスと神と共にある命へと迎えられるのです。

■業を行う者とされている

「わたしを信じる者は、わたしが行う業を行い、また、もっと大きな業を行うようになる」とあります。信じて、主イエスと神との交わりに迎えられる者は、主イエスが行うよりもさらに「大きな業」を行うようになる、というのです。ほかでもない、2000年後を生きるわたしたちクリスチャンも、「大きな業」を行う者とされている、ということです。そんなことできない、できていない、と思われるかもしれませんが。しかしたとえば、主イエスの愛に動かされ、誰かに優しくしようとするとき、それはもう「業」を行なっているのです。ある人があなたと出会って、優しさを感じたなら、その人はあなたを通して主イエスの、神の優しさに触れたのです。あなたの業を通して主イエスに出会う、み言葉が分かる、ということが起こる。主イエスと神との交わりにあなた自身が生かされているなら、あなたを通してその交わりに人が迎え入れられる。だれかを赦そう、愛そうと大げさに構えずとも、今日一日を感謝して過ごそう、クリスチャンとして、主イエスの愛によって生きようとする日々の営みのなかでなされる一つ一つが、「業」にほかならないのです。たしかに、その一つ一つは小さなものかもしれませんが。しかし、かつて地中海地方の小さなクリスチャンの群れでなされた小さな「業」が、2000年後の今、世界中に伝播し、大きな「業」となっているのです。この現実を目を向けるとき、主イエスがおっしゃったことが「本当だ」と頷かずにいられません。わたしたちはこの闇が支配しているようにすら感じられる世界のなかで、また、心騒ぐ日常のなかであっても、主イエスを信じ、その道において愛と赦しに与るなら、光の力が与えられるのです。そして、その力によって、たとえ小さくとも、闇のなかで光の業を行うことができるのです。

「わたしは道であり、真理であり、命である。」これが、十字架に向かう主イエスがなんとしてでも弟子たちに伝えたかった言葉です。わたしたちの救い主は、わたしたちが心騒ぐことを放ってはおかず、主イエスと神とともに「住むところ」を用意するために命を捨ててくださり、そこにいたるための道にまでもなってくれる方です。心騒ぐこともある。どうにならない後悔にとらわれることもある。しかし、「信じなさい」と主イエスは言われています。主イエスの息吹を受け、信じる者として、光の中を歩むことができますように。